

きょう一日のこと

眞 守 津



朝

久しぶりに、園長室で周郷先生と話し、考えることが多くあった。

『いまの日本には出口がないなあ』と周郷先生がまずいわれる。何もかもが一人の力ではどうしようもないところで動いてゆく。子どものことを考えるとこうし方がよいとわかっていても、簡単なこ

とが実行できない。途中でいろいろな理くつがついて、本当にたいせつなことが置き去られてしまい、そのままずるずると動いてしまう。ふみ止まって、子どもにしてやらなければならないことに手であてつづけることは、大へん力を要する。お母さんたちのことでもやらなければならないことがいろいろある。知的教育を先ばしる親や社会がある反面、赤ん坊をほおり投げたり、車の中に閉じこめたりする新聞記事はあとを絶たない。

大学は、こういう問題を出発点にして研究が始められなければ、学問は宙に浮いてしまうのではないか。それには現実とふれる実習の場が必要となる。そこになるとあちこちに壁ができる。先年、フルブライト教授で来られていたハリス教授のいわれたことを思い出す。ハリス教授がミネソタ大学の児童研究所長をしておられたころ、両親教育という講座をつくり、フィールドワークを主として盛んな

活動をしていた。ハリス教授がそこを去られて後その児童研究所は実験的理論研究に切りかわり、いまは両親教育の活動はあとかたもないそうだ。ハリス教授はそのことを大へん残念がっておられた。他人からは何をしているのかわからないような抽象的な研究の方が、幼児教育や両親教育の現場をもとにした研究よりも、高度で上等なように思うのは、この国の大学にも共通のことのようである。

周郷先生と話していると、きつとテイヤール・ド・シャルダンのはなしが出る。この哲学者は、ニュートンが万有引力の法則という世界を包括するような法則ですべてを説明したように、宇宙的な視野ですべてを見ていこうとするのだそうである。

私は最近みずす書房から出版されたピアジェの「哲学の知恵と幻想」という書物のことを思い起こす。これは科学的心理学の立場から、哲学的心理学、ことに

現象学を痛烈に批判している書物である。あまりに手痛く批判してあるから、読む人はサルトルやメルロ・ポンティの現象学など読む必要もないと思うほどである。それにはヨーロッパやフランスの世界の特殊性も背景にあるようである。

しかし、日本の現状では、子どもや人間のことを深く考える哲学がなさすぎる。ピアジェがそんなにも熱をこめて否定しようとするだけの哲学的地盤があるので、ピアジェ自身哲学的傾向をもった人であるから、ことさらに反発を感じるのであろう。二十世紀に発展した科学的心理学は、宇宙や自然の大法則の中にあるものとしての人間を見落としがちであったのではないだろうか。自然を認識の対象としてとらえるのみで、人間の精神は大自然の法則の中にあることを見落としはしなかったか。

私は、児童研究もスタンレー・ホール（二十世紀初頭の児童心理学創始者）までさかのぼると、もっと全人間に対する

関心が見られると思うところ、周郷先生は、いや、レヴィストロースが原始にさかのぼったように、思い切つてさかのぼらなければだめだといわれた。私はそれは傾聴すべきことであると思つた。宇宙から疎外された人間を研究して、それを生きた子どもにあてはめようとしたら、誤りを犯すだろう。

屋

それから数人の学生とお茶をのんで話した。その若い人たちは一昨日この雑誌の企画した座談会「普通幼稚園の中の特殊幼児」に参加し、ちえおくれや肢体不自由といわれている子どもたちが、互いに何のくつたくもなく集団生活をしている幼稚園の現状をきき、感動した人たちである。その若い学生たちは、そういう幼稚園の中にはいろいろ実習する中から卒業研究をすすめたい意志を語った。私は若い人たちの中に健全なものが育ちつつあるのを見た。それが実るようになっていく。

夕

夕方から私は、ある定例研究会に出席した。それはある幼児の現場で行なわれたが、たまたま、教人の男子学生の手によつて砂場の改修が行なわれていた。学生たちはいろいろと工夫し、砂場の一部を仕切つて、たえず水と砂が一緒になつて浸るように工夫して作つた。ところが、その庭を共有している幼稚園より苦情が出て、水たまり場は困るという。その理由は、砂場で水を使うと底の泥が混じること、洋服が汚れるなどであった。最近お茶大の附属幼稚園では、砂場ではだしになって遊ぶようになっていく。水たまりにはだしではいる体験は、いまの子どもには幼稚園でもなければ得られないであらう。昨日は、私共の幼児保育研究室の研究会で、一人の学生がこの砂場の記録をとり上げ、従来はともかく、現在のコンクリートにかこまれて生活している子どもたちには、砂場の水の中をほだして遊ぶ経験は、特別の意義があるこ

とを報告した。私はそのことを引用し、また、最近附属幼稚園でカナリヤやニワトリをはなし飼いにしていると、きつただれかが鳥を抱いたり、頭にのせたりしていることを語った。

その研究会では、ある発達おくれの子どもの保育事例報告があった。その議論のときに「子どもの行動としては、とくに大きな進歩もなかったと思うが、それでよいのだと思う。その子をかわいいと思つてそばにいてくれる人があることが重要で、行動がどのようにのびたかということは考える必要のないことだ」という保育担当者の感想がのべられた。一般にその場合、結果としては教育効果は上るのであるが、教育者としては、教育効果をめざした教育をまず考えるところ。世間の風潮に流されてはならないと思う。

夜

家に帰る途中で買ったサンデー毎日の

「お母さんに急告！戦後の文字教育は根本的に間違っていた」に目を通した。マスコミが発達して以来、こういうこと少しばしば起きている。局部的にもを見て、親にあせりを抱かせるマスコミは、どんなに多くの子と親を苦しめているかを自覚すべきである。（記録提供者の親は責められない。）

また、夜、親戚の若い母親から電話があり、四月から幼稚園にいきはじめて四歳の子どもが、幼稚園にいかなくなつた、どうしたらよいかという。四十五人が一クラスにいて、その子は耳をふさいで歩いているのだそうである。先生がこわいというが、自分が怒られるのではなく、大きな声で他の子にいうのがこわいのだという。二週間たつて、とうとう幼稚園にいかなくなった。四十人もの幼児を一人の先生が担当することは不可能なことをしているのだということ、自明なことができない現代。

幼児の教育 第七十巻 第八号

八月号 © 定価一〇〇円

昭和四十六年七月二十五日印刷
昭和四十六年八月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします